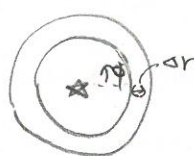


### 3.2.3 Temperature profile of accreting disks

accreting disk の radial 方向の有効温度を求めよう。

幅  $\Delta r$  の "リング" の総トルクを考慮する。

$$\rightarrow \frac{\partial G}{\partial r} \Delta r \quad \left( \begin{array}{l} G: \text{中方向を方向に適合した } r \text{ までの総トルク} \\ \text{その差分を } \Delta r \text{ として} \end{array} \right)$$

$$\frac{G(r+\Delta r) - G(r)}{\Delta r} \cdot \Delta r$$


仕事率は、

$$\underbrace{\frac{\partial G}{\partial r} \Delta r}_{\text{総トルク}} \equiv \left[ \frac{\partial}{\partial r} (G\Omega) - G\Omega' \right] \Delta r, \quad (3.28)$$

ただし  $\Omega' = \frac{d\Omega}{dr}$

(3.28) 右辺に  $\rightarrow$  して、

第一項:  $\frac{\partial}{\partial r} (G\Omega)$

$$G\Omega = |F_{\text{grav}}| \cdot \frac{v_{\text{rot}}}{r} = FV \quad [\text{J} \cdot \text{s}^{-1}]$$

"リング" を通しての、粘性トルクによるエネルギーの輸送  
 率は  $G\Omega|_{\text{out}} - G\Omega|_{\text{in}}$  なの、境界条件により決まる。

第二項:  $-G\Omega'$

ローカルの、エネルギーロス、

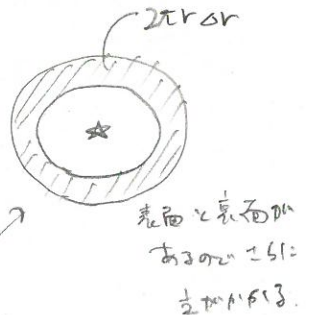
$$\left( \Omega' = \frac{d\Omega}{dr} \right)$$

エネルギーのロスは、熱と放射となる。

円盤の単位表面積あたりの放射のエネルギーロス

$$D(r) = \frac{G\Omega'}{4\pi r} = \frac{9}{8} \nu \Sigma \Omega^2 \quad (\Omega = \Omega_{\text{Kepler}} \text{ を仮定}) \quad (3.29)$$

$$\left( \begin{array}{l} \therefore G = 2\pi r \cdot \nu \Sigma r \frac{d\Omega}{dr} \quad , \quad \Omega' = \frac{d\Omega}{dr} = -\frac{3}{2} \sqrt{\frac{GM_*}{r^3}} = -\frac{3}{2} \frac{\Omega}{r} \\ \frac{G\Omega'}{4\pi r} = \frac{1}{4\pi r} \cdot \frac{1}{2} \cdot \nu \Sigma r^2 \cdot \Omega^2 \\ = \frac{9}{8} \nu \Sigma \Omega^2 \end{array} \right)$$



Blackbody radiation を考えよ.

$$D(r) = \sigma T_{\text{disk}}^4$$

$$\rightarrow \nu \Sigma = \frac{\dot{M}}{3\pi} \left(1 - \sqrt{\frac{R_*}{r}}\right)$$

これと、円盤進化の式の定常解 (3.20) を用いて.

かつ  $\Omega = \Omega_{\text{Kep}}$  を用いると、(3.29) より、

$$T_{\text{disk}}^4 = \frac{3GM_*\dot{M}}{8\pi\sigma r^3} \left(1 - \sqrt{\frac{R_*}{r}}\right) \quad (3.30)$$

◦ inner boundary から離れると ( $r \gg R_*$ ).

$$T_{\text{disk}} \propto r^{-\frac{3}{4}}$$

◦ razor-thin disk (flat で厚みのない disk を意味)  
と同じ形 ( $\propto r^{-\frac{3}{4}}$ )

◦ viscosity に依存しない

- 不定性がある点があるから、逆に観測から逆に円盤  
知識は得られる。

$$\dot{M} = 10^{-7} M_{\odot} \text{ yr}^{-1} \text{ とすると}$$

太陽質量の星に対する、1AU での有効温度は

$$T_{\text{disk}} = 150 \text{ K}$$

これは表面温度

### 3.3 Vertical structure of protoplanetary disks

- 重力ポテンシャルエネルギーが解放されて熱になる  
これは、密度が最も大きい円盤の mid-plane に  
集中して起こる。



- 円盤では大体の場所では  $\tau \ll 1$  → 放射で直接熱を逃がさない。  
→ 乱流の放射拡散 (turbulence or radiative diffusion)

- ここでは、accreting disk の鉛直方向の温度勾配を計算する。

viscosity の強さは disk 表面より中心の状態に依るので、大抵  
ほぼすべてのモデルで

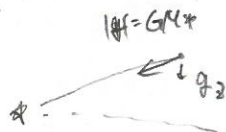
- viscosity のモデルと鉛直構造から  
円盤構造と進化の自己矛盾のないモデル (self-consistent model)  
を導く。

平行平面を考える。また、エネルギーの輸送は radiative diffusion  
によるとする。解くべき式は、

1. 静水圧平衡 (hydrostatic equilibrium)

$$\frac{dP}{dz} = -\rho g_z \quad (3.31)$$

$g_z$  は鉛直方向の重力 (式(2.5))



2. flux  $F_z$  の鉛直方向の変化

$$\frac{dF_z}{dz} = \frac{9}{4} \rho \nu \Omega^2 \quad (3.32)$$

→ 片面と対して  
上下両面の flux を  
それぞれ  $F_z$

(式(3.29)より)

3. 放射拡散の式 (optically thick な媒質での flux と温度勾配の関係)

$$\frac{dT}{dz} = -\frac{3K_R \rho}{16\sigma T^3} F_z \quad (3.33)$$

(導出は後のページ)

+ eq. of state (P, ρ, T の関係), Rossland mean opacity  $K_R$ ,  
boundary condition + viscosity?

もし、求まった温度分布が断熱状態でのそれより大きかったら  
+ 対流 flux が必要. (分配が  $\rightarrow \rho' < 0$ )

### 3.3.1 The central temperature of accreting disks

仮定.  $z=0$  に近 "ほど", viscosity に 依る.  
"エネルギー" 散逸は 強

mid-plane  $\rho$  の 表面  $\Sigma$  での  $\tau$

$$\tau = \frac{1}{2} K_R \Sigma \quad (3.34)$$

$K_R$ : Rossland mean opacity

$\Sigma$ : 表面密度

$\rho(z)$ : 密度の鉛直  $z$  方向

鉛直方向の "エネルギー" 輸送は、放射拡散

$$F_z(z) = - \frac{16\sigma T^3}{3K_R \rho} \frac{dT}{dz} \quad (3.35)$$

簡単のために、"エネルギー" 散逸は 全て  $z=0$  でおこるとする.

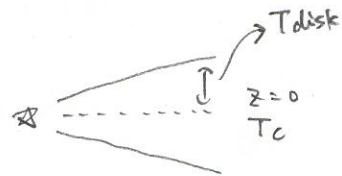
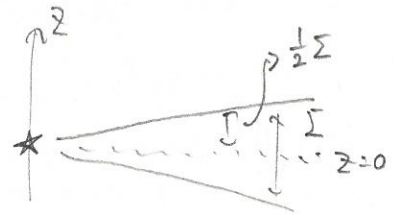
このとき,  $F_z(z) = \sigma T_{\text{disk}}^4 = \text{const}$

$K_R = \text{const}$  と 仮定

$$F(z) = - \frac{16\sigma T^3}{3K_R \rho} \frac{dT}{dz} = \sigma T_{\text{disk}}^4$$

$$- \frac{16}{3K_R} \int_{T_c}^{T_{\text{disk}}} T^3 dT = T_{\text{disk}}^4 \int_0^z \rho(z') dz' \quad (3.36)$$

$$- \frac{16}{3K_R} \left[ \frac{T^4}{4} \right]_{T_c}^{T_{\text{disk}}} = T_{\text{disk}}^4 \frac{\Sigma}{2} \quad (3.37)$$



$\tau \gg 1$  のとき、 $T_c^4 \gg T_{\text{disk}}^4$  と思う。

$$-\frac{16}{3KR} \left[ \frac{T^4}{4} \right]_{T_c}^{T_{\text{disk}}} = -\frac{4}{3KR} (T_{\text{disk}}^4 - T_c^4) \sim \frac{4}{3KR} T_c^4$$

f02

$$\frac{T_c^4}{T_{\text{disk}}^4} \approx \frac{3}{4} KR \cdot \frac{\Sigma}{2} = \frac{3}{4} \tau \quad (3.38)$$

- $\tau \gg 1$  の active disks では、表面より中心の方が熱い。  
例として、 $\tau = 10^2$  だと  $T_c \approx 3 T_{\text{disk}}$
- 氷とか凍らぬとか存在できるか、か決まる。

accretion による  $E = \tau \Sigma c^3$  にかえて、星からの放射が加わる場合。

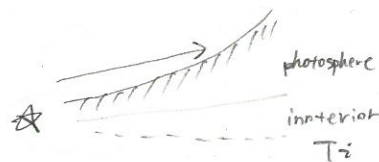
$T_{\text{disk, visc}} \equiv \tau$  の  $T_{\text{disk}}$   
 : accretion による有効温度  
 $T_{\text{irr}}$  : 放射の外に :

$$T_c^4 \approx \frac{3}{4} \tau T_{\text{disk, visc}}^4 + T_{\text{irr}}^4 \quad (3.39)$$

これも  $\tau \gg 1$  のとき注意

$T_{\text{irr}}$  は passive での放射平衡にある disk での

$T_i$  (interior temperature)



### 3.3.2 Shakura - Sunyaev 2 prescription

accreting disk の有効温度 (式 3.30) は粘性係数  $\nu$  とは独立.

( $\Rightarrow$ ) 円盤進化のタイムスケール. 面密度  $\Sigma$  のプロファイルは、 $\nu$  に依存.

$\nu$  は  $\nu$  を考える  $\nu$  と  $\tau$  の。粘性による角運動量輸送の根本的な物理は何か。

#### ① Molecular collisions (molecular viscosity)

地球流体では一般的に

ナビエ・ストークスの式 (Navier - Stokes equations) でモデル化される。

近似的に

$$v_m \sim \lambda c_s \quad (3.40)$$

$\lambda$ : mean-free path

$$\lambda = \frac{1}{n \sigma_{mol}} \quad (3.41)$$

$\sigma_{mol}$ : cross-section for molecular collisions

オージェーでの見積り

$$\sigma_{mol} \approx 2 \times 10^{-15} \text{ cm}^2 \quad (3.42) \quad \text{衝突の横断面積 (cross section)}$$

$$c_s = 0.5 \text{ km s}^{-1} \quad \text{at } 10 \text{ AU}$$

$$n = 10^{12} \text{ cm}^{-3}$$

$$\rightarrow v_m \sim 2.5 \times 10^7 \text{ cm}^2 \text{ s}^{-1} \quad \tau \sim \frac{r^2}{\nu} \quad \text{拡散方程式 (1)}$$

このタイムスケールは、(式 3.11) より

$$A \tau \approx \frac{r^2}{v_m} = 3 \times 10^{13} \text{ yr} \quad (3.43)$$

( $\Rightarrow$ ) 観測から円盤進化のタイムスケール  $\sim 10^6 \text{ yr}$   
 $10^7 < \tau$  異なる。



Molecular viscosity では  $\eta = \dots$

\* 粘性係数の小さいことに注意

Reynolds 数は、

$$Re = \frac{UL}{\nu_m} \quad (3.44)$$

$U, L$  : 系を特徴づける速度と長さ、  
で定義される。

$U = C_s, L = h = 0.05 r$  とすると、 $10^4 U^2$

$$Re \sim 10^2$$

とかなり、大きくなる。

disk に対して小さい年で散逸が弱。→ 乱流

## ② turbulence

乱流がおおむね等方的であること。

- 乱流の元々は、円盤の最も小さいスケール以下

(スケールハト:  $h$ )

- 一般に

- 乱流の速度は  $C_s$  以下

超音速だと shock を起こしてよく散逸する。

→  $\alpha$  turbulent viscosity は、

$$\nu = \alpha C_s h \quad (3.46)$$

と書ける。

$\alpha$  : Shakura - Sunyaev 2 parameter

無次元量で、乱流による角運動量輸送の  
効率を示す。



式 (3.46) について

- 粘性係数  $\nu$  が、disk の local 質量 ( $C_s, h$ ) で書ける  
 → disk の local 構造が計算できる。
- $\alpha$  は 1 より小さい (= 制限) が、定数である必要はない  
 温度、密度、gas の成分により変化する。
- molecular viscosity と同じ次元をもつが、全く異なるプロセスから生じることに注意。  
 特に、molecular viscosity に対して正しい、+E、ストークスと伊の+E、  
 比べて方がよい。

### 3.3.3 Vertically averaged solutions.

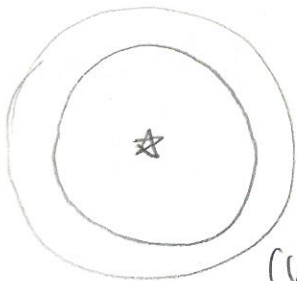
- (3.46) を用いて、 $\nu$  を  $r, \Sigma, \alpha$  の関数で書ける。
- $\nu$  は、定常解 (3.20) を決められる。
- 式 (3.6) の円盤進化の式と合わせて、任意の初期面密度に  
 対する、時間進化の解が得られる。

vertically averaged or "one zone" 近似

$$\frac{T_c^4}{T_{disk}^4} \approx \frac{3}{4} \tau$$

eq. of radiative diffusion 式 (3.33) → 近似解 (3.38)

鉛直方向の平均  $\Sigma$  に依存するパラメータ →  $z=0$  の値  
 $\nu = \nu$  を考える



- surface density:  $\Sigma$  → 解が  $\Sigma$  になる
- angular velocity:  $\Omega = \Omega_K = \sqrt{\frac{GM_*}{r^3}}$  (既知)
- mid-plane Temp.:  $T_c$
- effective:  $T_{disk}$
- sound speed:  $C_s$
- (Volume) density:  $\rho$
- scale height:  $h$
- opacity:  $\kappa_R$
- viscosity:  $\nu$
- optical depth:  $\tau$



$T_{\text{disk}} \neq T$  以外は、全  $z=0$  の値を考えた

$T_{\text{disk}}$ : photosphere で定義される。

$\tau$ : 表面と mid-plane の間を深さ。

式をまとめると

$$v = 2c_s h \quad (3.47)$$

$$c_s^2 = \frac{k_B T_c}{\mu m_p} \quad (3.48)$$

$$\rho = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \frac{\Sigma}{h} \quad (3.49)$$

$$h = \frac{c_s}{\Omega} \quad (3.50)$$

$$T_c^4 = \frac{3}{4} \tau T_{\text{disk}}^4 \quad (3.51)$$

$$\tau = \frac{1}{2} \Sigma K_R \quad (3.52)$$

$$v \Sigma = \frac{\dot{M}}{3\pi} \quad (3.53)$$

$$\sigma T_{\text{disk}}^4 = \frac{9}{8} v \Sigma \Omega^2 \quad (3.54)$$

$K_R$  が深さによらず、変数  $\sigma$  に式  $\sigma$  を解いた。

$K_R$  は密度と温度の power-law と近似できるが、 $v$  は  $r$ - $a$ - $\Sigma$  の power-law とする。

例) mid-plane の opacity が水粒子による disk を考えた。

そのとき、近似的に

$$K = K_0 T_c^2 \quad (3.55)$$

$$K_0 = 2.4 \times 10^{-4}$$

すなわち

上の式から変数を消して ( $\rho$  の代わりに式がある)

$$\Sigma^3 = \frac{64}{81\pi} \frac{\sigma}{K_0} \left( \frac{\mu m_p}{k_B} \right)^2 \Omega^{-2} \dot{M} \quad (3.56)$$

